

新しい学びへの対応について

- 国内外の学力調査の結果等から、我が国の子どもたちは、知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等に特に課題がある。
- これを踏まえ、新学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等を育成するため、特定の教科に限らず学校の教育活動全体を通じて、観察・実験やレポートの作成、論述等の知識・技能を活用する学習活動を充実。
- そのためには、従来の一斉指導の方法のみならず、プレゼンテーションやディベート、対話・討論等のグループ学習などを通じた言語活動や体験活動、ICTの積極的な活用をはじめとする指導方法・指導体制の工夫改善により、協働型・双方向型の授業革新を推進する必要。

公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議(第13回)配付資料

【参考】思考力・判断力・表現力等を育む学習活動について

中央教育審議会答申において、思考力・判断力・表現力等を育成するために重要であるとして、以下①～⑥の学習活動を例示。各教科の教育内容として、記録、要約、説明、論述、討論といった学習活動に取り組むことが必要。

【思考力・判断力・表現力等を育む学習活動の例】

① 体験から感じ取ったことを表現する

(例) ・ 日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

(例) ・ 身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

(例) ・ 需要、供給などの概念で価格の変動を捉えて生産活動や消費活動に生かす
・ 衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

(例) ・ 学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する
・ 文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚(1000字程度)といった所与の条件の中で表現する
・ 自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする
・ 自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

(例) ・ 理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする
・ 芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

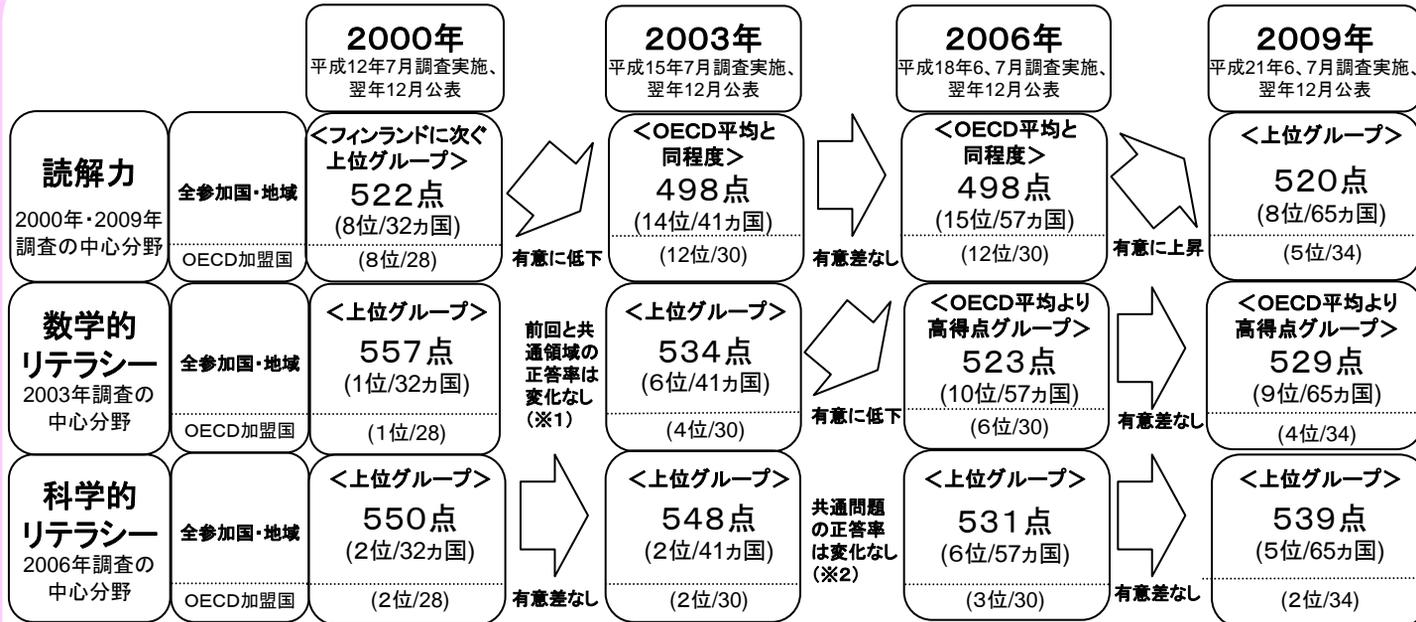
(例) ・ 予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う
・ 将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験をさせる

公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議(第13回)配付資料

OECD生徒の学習到達度調査(PISA2009)

これまでの推移

・PISA調査: OECDが15歳児(我が国では高校1年生)を対象に実施



※1 2000年、2003年の共通領域の結果で比較

※2 出題の枠組みが変わったため、比較可能な共通問題の結果で比較

PISA2009の結果

○読解力を中心に我が国の生徒の学力は改善傾向にある。

〔各リテラシーとも、2006年調査と比べて、レベル2以下の生徒の割合が減少し、レベル4以上の生徒の割合が増加している。〕

しかしながら、トップレベルの国々と比べると成績の下位層が多い。

○読解力については、必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手である。

	レベル 1以下	レベル 2	レベル3	レベル 4以上
日本	13.6%	18.0%	28.0%	40.4%
上海	4.1%	13.3%	28.5%	54.1%
韓国	5.8%	15.4%	33.0%	45.8%
フィンランド	8.1%	16.7%	30.1%	45.1%

(例) 読解力の習熟度レベル別割合

「情報へのアクセス・取り出し」530点(平均正答率74%)、

「統合・解釈」520点(平均正答率62%)、「熟考・評価」521点(平均正答率59%)

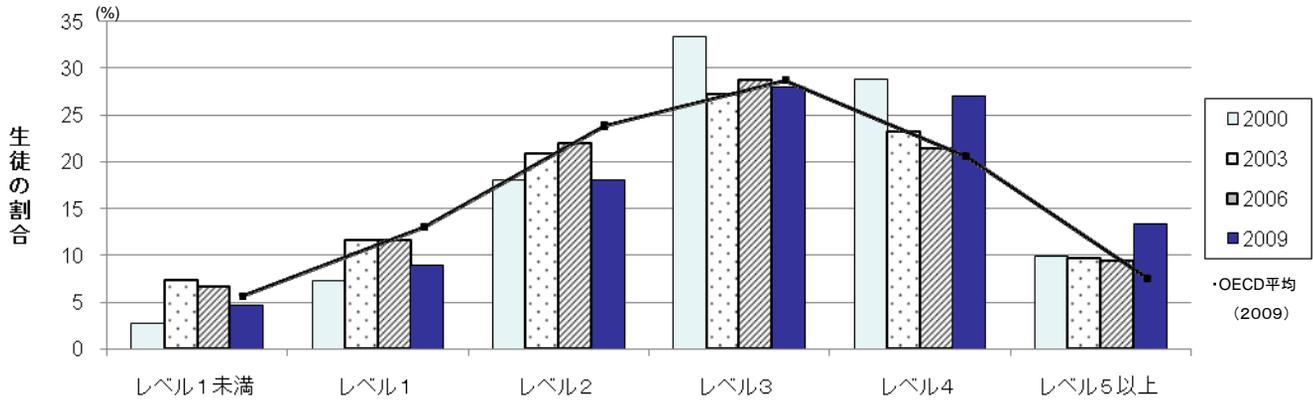
○数学的リテラシーについては、OECD平均は上回っているが、トップレベルの国々とは差がある(順位の幅 8~12位)。

○「趣味で読書をすることはない」生徒の割合は、2000年調査から減少

(55.0% → 44.2%)したものの、諸外国(OECD平均37.4%)と比べると依然として多い。

PISA わが国の習熟度レベル別の生徒の割合（経年変化）

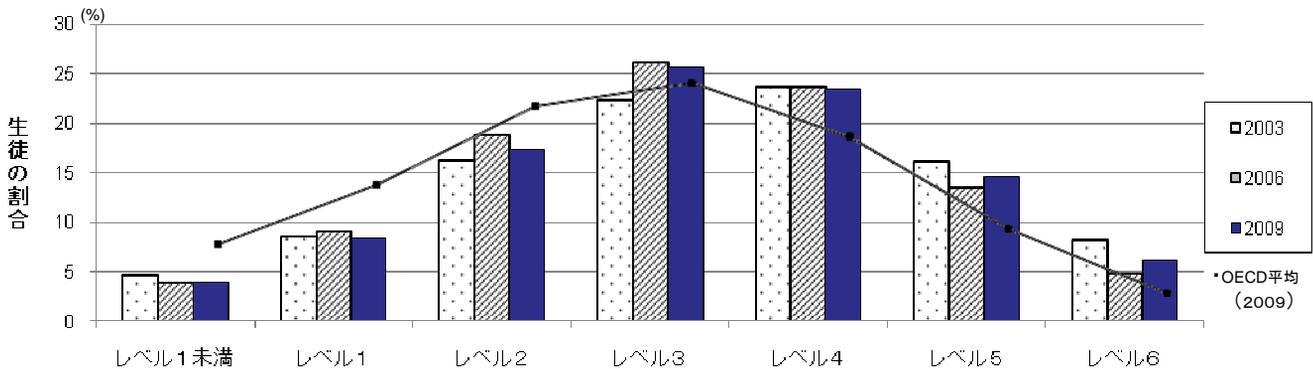
○ 読解力



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル2以下の生徒の割合が減少し、レベル4以上の生徒の割合が増加。

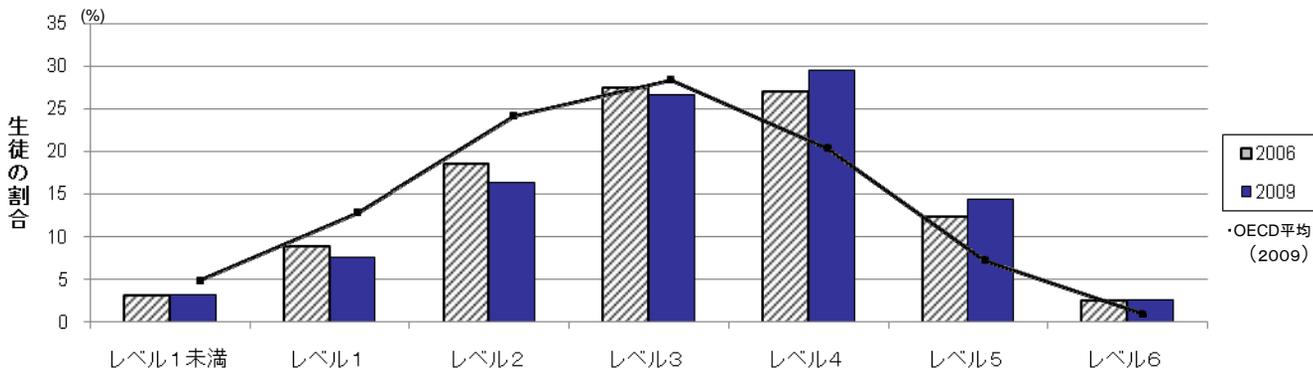
※比較のため、レベル1未満には2009年調査におけるレベル1bおよびレベル1b未満を、レベル5以上にはレベル5およびレベル6を含めている。

○ 数学的リテラシー ※習熟度レベル別の生徒の割合はPISA2003から調査を開始



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル2の生徒の割合が減少し、レベル5以上の生徒の割合が増加。

○ 科学的リテラシー ※習熟度レベル別の生徒の割合はPISA2006から調査を開始



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル1、2の生徒の割合が減少し、レベル4及び5の生徒の割合が増加。

平成24年度全国学力・学習状況調査の結果について(概要)

調査概要

- 平成24年4月17日実施(抽出調査(抽出率約30%))
- 小学校第6学年、中学校第3学年が対象
- 国語、算数・数学に加え、初めて理科を実施
- 児童生徒及び学校に対し、生活習慣や学習環境等に関する調査も実施

～教科に関する調査結果～

～理科における主な結果～

【平均正答率が低いもの】

観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、説明することなどに課題が見られる。

●小学校理科

- ・観察・実験の結果を整理し考察すること(例:天気の様子と気温の変化の関係についてデータを基に分析して、その理由を記述する設問[4](5)(小学校理科で最も平均正答率が低かった設問(17.1%))
- ・科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりすること(例:水が温度によって水蒸気や湯気に変化する性質と、この性質が風車を動かすエネルギーとして利用されることに着目して考察する設問[3](5)カ(42.7%))

●中学校理科

- ・実験の計画や考察などを検討し改善したことを、科学的な根拠を基に説明すること(例:豆電球と発光ダイオードを用いた電流回路をつくる実験の方法を検討し改善して、科学的な根拠を基に正しい実験方法を説明する設問(中学校理科で最も平均正答率が低かった設問2(7.8%))
- ・実生活のある場面において、理科に関する基礎的・基本的な知識や技能を活用すること(例:両生類であるカエルを飼育する場面において、成長に応じて環境を整えた理由を説明する設問[1](2)(38.5%))

【平均正答率が高いもの】

○小学校理科

- ・物は形が変わっても重さは変わらないこと^{の理解}1(85.9%)
- ・方位磁針の名称の理解(小学校理科で最も平均正答率が高かった設問[4](2)(89.8%))

○中学校理科

- ・電力に関する知識を活用して、LED電球の省エネの効果^{を考えること}[2](3)Y(84.8%)
- ・地層のつながりや成り立ちを調べるために、断層の有無や地層に含まれている粒に着目するという地層観察の技能に関する知識(中学校理科で最も平均正答率が高かった設問[3](1)(87.3%))

～国語、算数・数学における主な結果(平均正答率が低く課題が見られるもの)～

記述式問題を中心に課題が見られる。(初めて出題した「ヒストグラム」(数学)等においても同様)

●国語

小学校: グラフや表に含まれる情報を正確に読み取った上で、話したり書いたりすること(例:資料「部活動に対する満足度」の内容を読み取った上で、中学生に対して質問をしたい内容を記述する設問B[2](5)(52.9%))

中学校: 相手の発言を注意して聞き、自分の考えを具体的に書くこと(例:「美しい日本語とは」をテーマにした対談を読んで、これからどのような言葉の使い方をしたいのかを具体的な言葉の例を挙げて書く設問B[1]E(20.6%))

●算数・数学

小学校: 方法や理由を言葉や数を用いて記述する際、場面の状況や問題の条件に基づいて、必要な事柄を過不足なく記述すること(例:買い物の場面で考えられる二つのお金の支払い方を解釈し、一方の支払いの方が、おつりの硬貨の枚数がより少なくなる理由を言葉と数を用いて記述する設問B[1](2)(42.8%))

中学校: 数学的に表現したり、数学的に表現された事柄を読み取ったりすること(例:二人のスキージャンプ選手の記録を比較し、より遠くへ飛びそうな選手を選び、その理由を数学的な表現を用いて説明する設問B[3](2)(47.1%))

～生活習慣や学習環境等に関する調査結果～

～児童生徒に対する調査～

○理科の勉強が好きな小学生・中学生の割合は国語、算数・数学に比べて高いが、「理科の勉強は大切」「理科の授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つ」と回答した小学生・中学生の割合は国語、算数・数学に比べて低い。

	小学校			中学校		
	理科	国語	算数	理科	国語	数学
勉強が好き	82%	63%	65%	62%	58%	53%
勉強は大切	86%	93%	93%	69%	90%	82%
授業で学習したことは将来社会に出たときに役に立つ	73%	89%	90%	53%	83%	71%

※「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合

○「理科の授業の内容はよく分かる」と回答した小学生と中学生の割合の差が国語、算数・数学と比べて大きい。

	小学校	中学校	差
理科の授業の内容はよく分かりますか	86%	65%	21%
国語の授業の内容はよく分かりますか	83%	72%	11%
算数・数学の授業の内容はよく分かりますか	79%	66%	13%

※「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合

○上記の理科の関心・意欲・態度に関する質問については、いずれも肯定的に回答した小学生・中学生の方が、理科の平均正答率が高い傾向が見られる。(中学生の方が小学生よりも傾向が強く見られる)

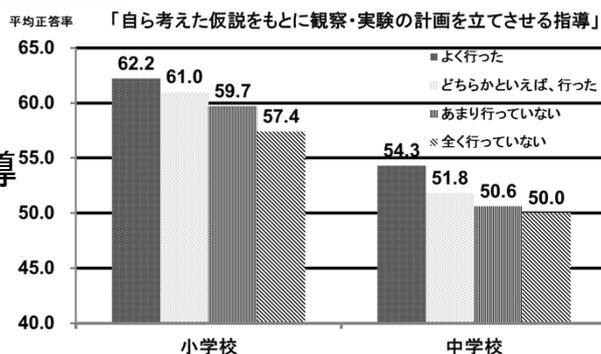
○理科の観察・実験に関する質問について、以下と回答した小学生・中学生の方が、理科の平均正答率が高い傾向が見られる。(中学生の方が小学生よりも傾向が強く見られる)

- ・観察や実験を行うことが好き
- ・自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている
- ・観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか振り返って考える 等

～学校に対する調査～

○理科の観察・実験に関する質問について、以下の取組を前年度に行った小学校・中学校の方が、理科の平均正答率が高い傾向が見られる。(中学校の方が小学校よりも傾向が強く見られる)

- ・自ら考えた仮説をもとに観察・実験の計画を立てさせる指導
- ・観察や実験の結果を整理し考察する指導
- ・観察や実験の際のノート等への記録・記述の方法の指導



【理科以外の新規項目】

○自然の中での集団宿泊活動を長い日数行った小学校の方が、国語B・算数Bの平均正答率が高い傾向が見られる。(小学校のみの項目)

平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の設計概要

- 対象学年(小6・中3)の全児童生徒を対象とした本体調査により、すべての市町村・学校等の状況を把握するとともに、
- 経年変化分析や経済的な面も含めた教育格差を把握するための調査等を新たに実施し、きめ細かい把握・分析を行う。

これによって、教育施策の成果と課題に関する検証改善、児童生徒に対する教育指導の改善等をきめ細かな形で行う。

(※「きめ細かい調査」は数年に一度継続的に実施)

すべての市町村・学校等の状況を把握・分析

追加調査による更にきめ細かい把握・分析

本体調査（全数・一斉実施）

- 調査日：25年4月24日（水）予定
- 対象：小6、中3

教科に関する調査（国語、算数・数学）

- 地域（市町村・学校等）の状況の把握・分析（震災の影響を含む）

質問紙調査（児童生徒・学校）

質問紙を複数化し、項目を充実

- 無解答の理由等の把握・分析
- 学校外での状況の把握
- 指導方法の状況の把握

専門家による追加分析

経年変化分析のための調査（抽出）

- 同一問題による厳密な経年変化分析
- 実施時期：25年5月～6月の一定期間内で対象学校が可能な日時
- 対象：本体調査を実施した児童生徒の一部
*小200校程度、中250校程度抽出
- 内容：国語・算数（数学） ※非公開
*各学校は1教科のみ実施（小40分、中45分）

保護者アンケート調査（抽出）

- 家庭状況等の把握
- 実施時期：25年4月末～5月頃
- 対象：本体調査を実施した児童生徒の保護者の一部 *小450校程度、中400校程度抽出

教育委員会に対する調査（全数）

- 効果のある施策の把握
- 実施時期：25年4月末～5月頃
- 対象：都道府県・市町村教育委員会

- 家庭状況等と学力等の関係の分析
- 指導方法と学力等の関係の分析 など

きめ細かい把握・分析

〈学力の把握・分析〉

- 地域の状況の把握・分析
- 経年変化分析
- 無解答の理由等の把握・分析

〈学力に影響を与える要因の把握・分析〉

- 家庭状況等による教育格差と学力等の状況の把握・分析

〈教育施策の検証等〉

- 国・教育委員会における教育施策の検証等（少人数学級等）

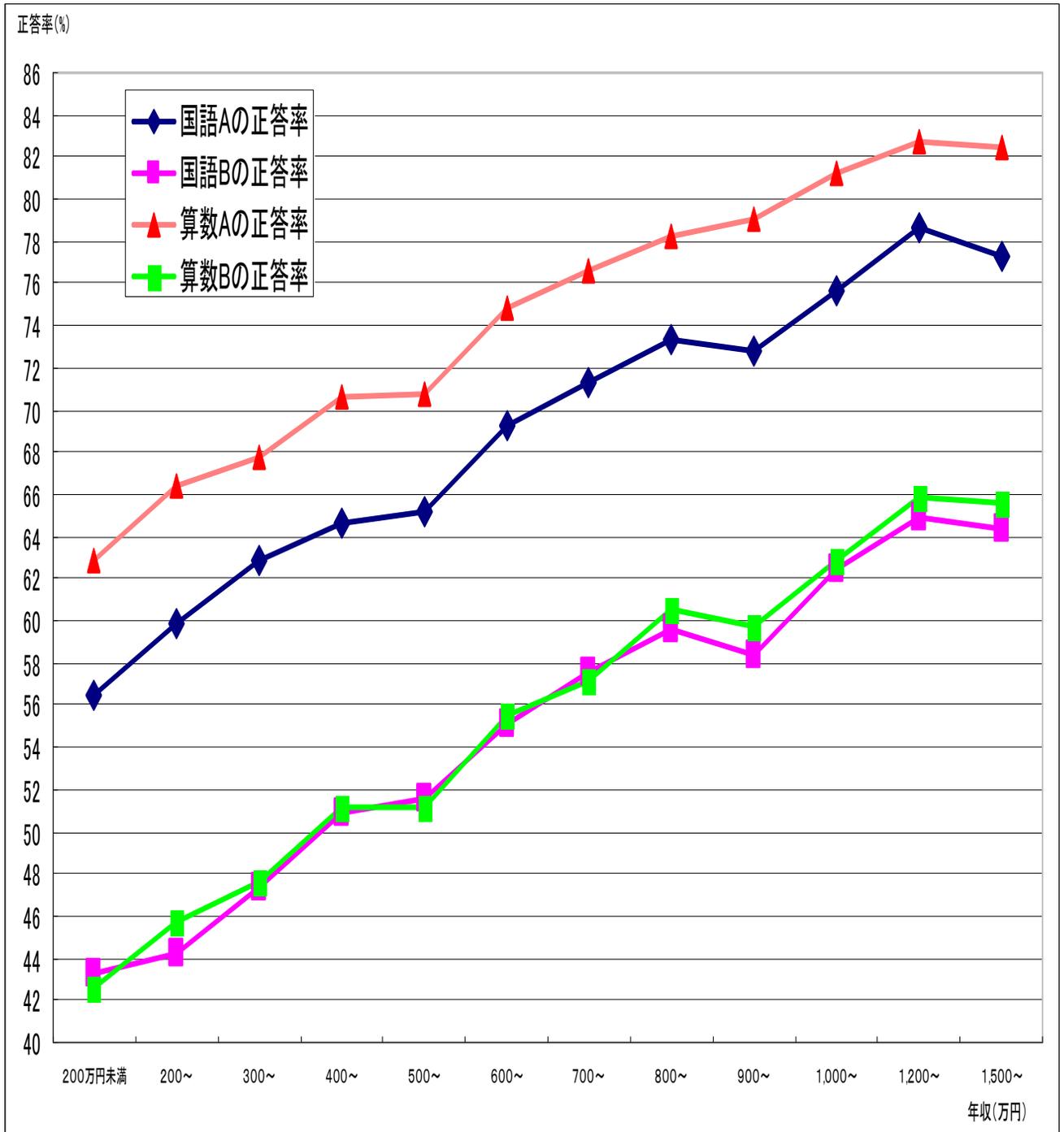
〈効果的な指導方法の把握・分析〉

- 学校における効果的な指導方法の把握・分析

世帯所得・学校外教育費支出と学力の関係

家庭の世帯年収が高いほど、児童の正答率が高い傾向

<児童の正答率と家庭の世帯年収>



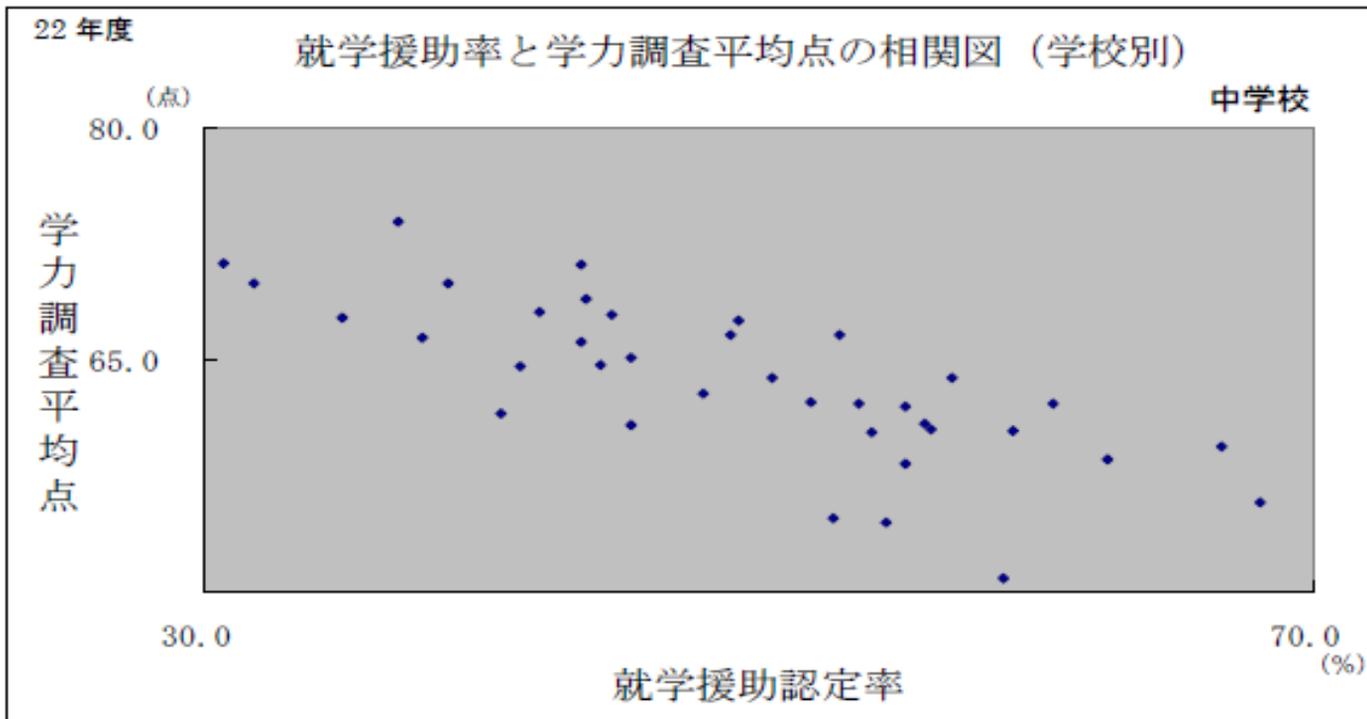
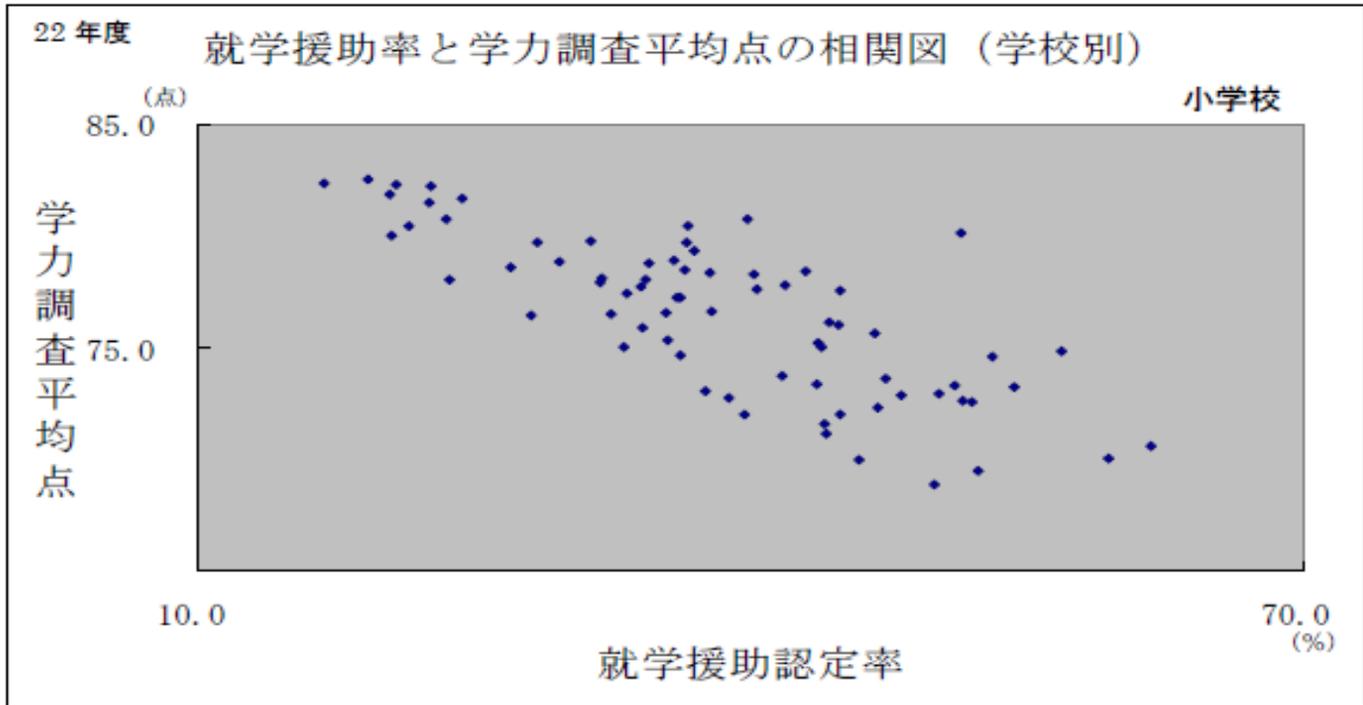
「文部科学省:お茶の水女子大学委託研究(平成20年度)」

調査対象:公立学校第6学年の児童の保護者

調査対象校:5政令都市の100校

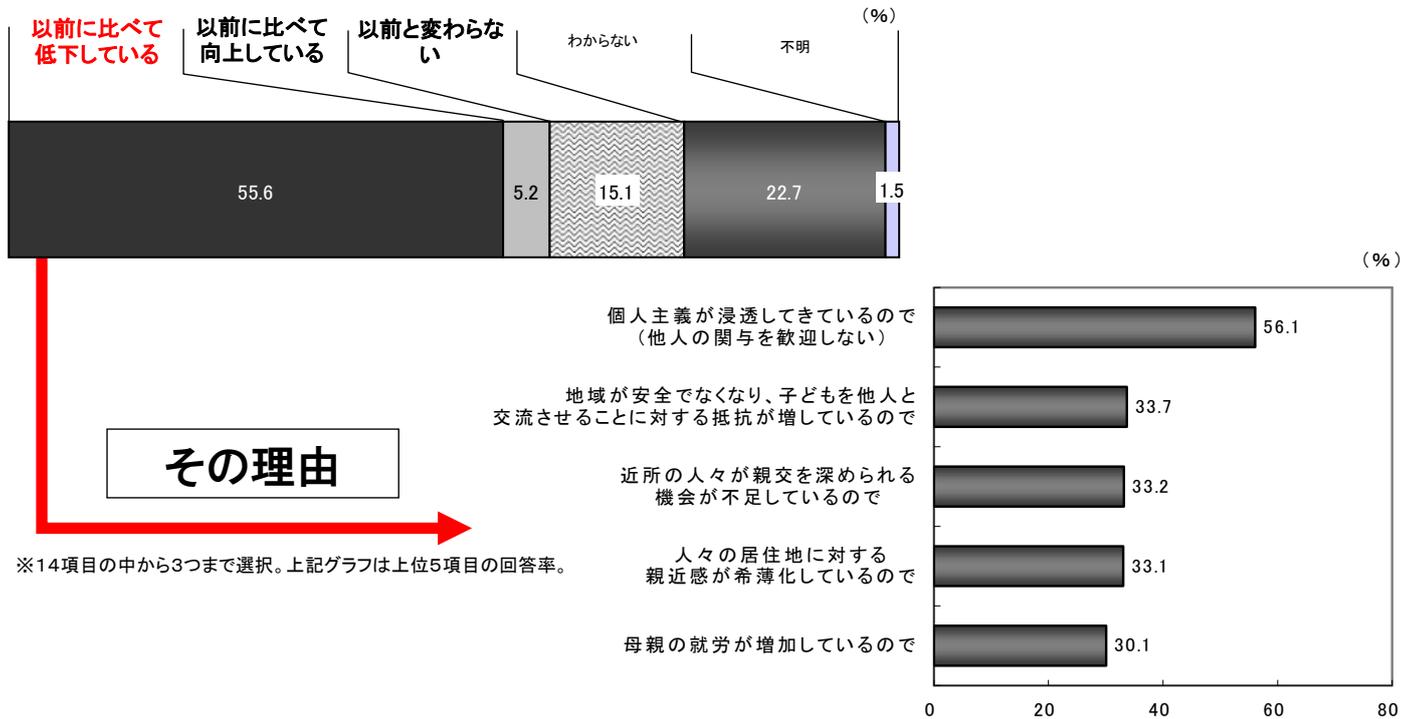
就学援助率と学力調査平均点との相関

小学校・中学校ともに、就学援助率が高いと学力調査平均点が低下する傾向



地域・家庭の教育力に関する意識(地域)

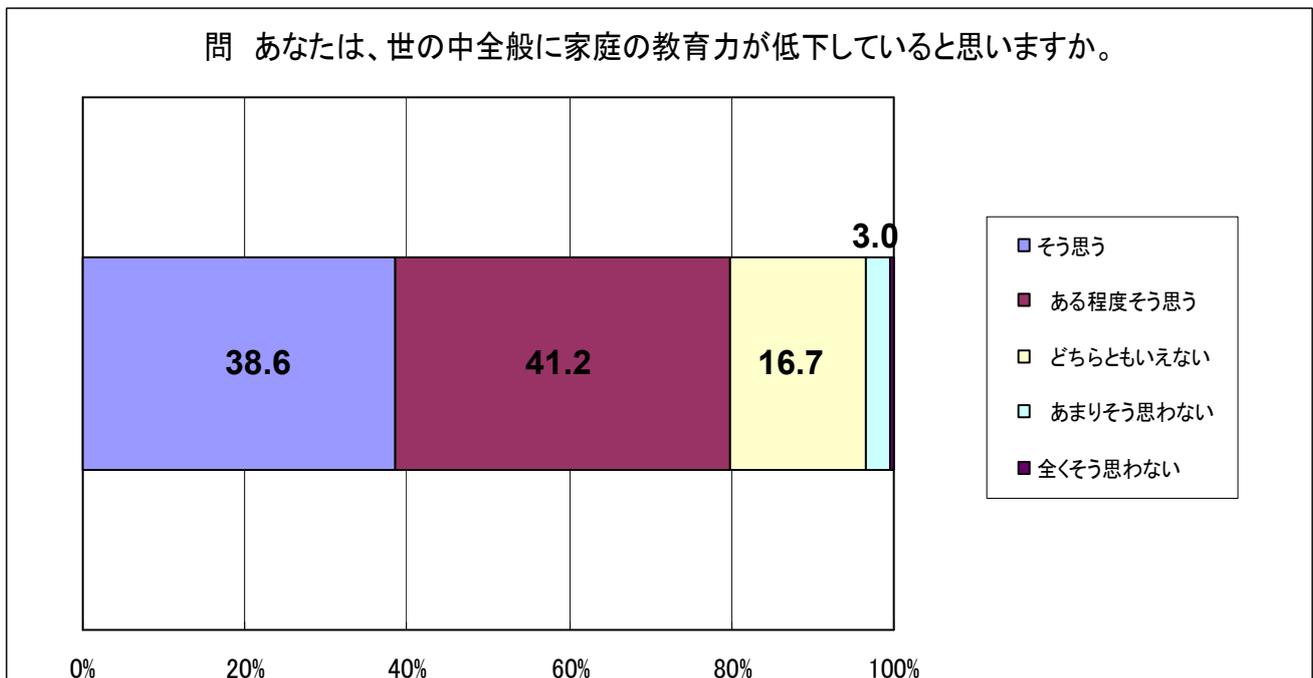
保護者に「地域の教育力」を自身の子ども時代と比較してもらったところ、**過半数が「以前に比べて低下している」(55.6%)と回答**。一方、「以前に比べて向上している」(5.2%)、「以前と変わらない」(15.1%)は低い割合。



文部科学省「平成17年度地域の教育力に関する実態調査」

地域・家庭の教育力に関する意識(家庭)

約8割の親が家庭の教育力が低下していると実感

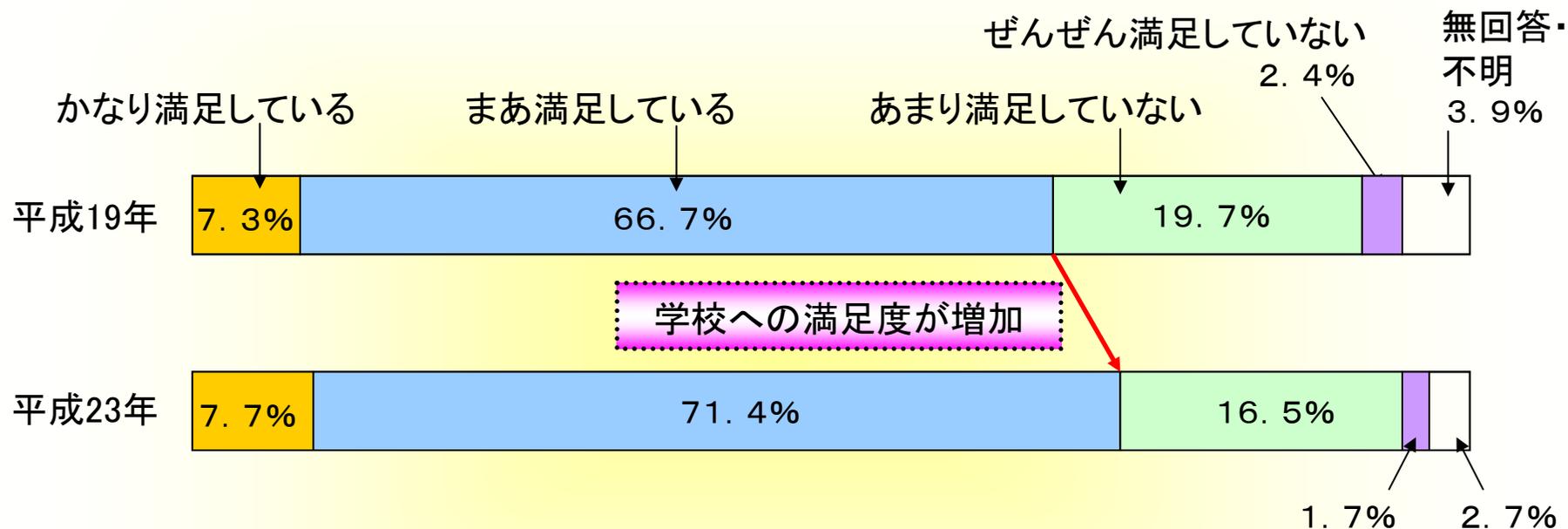


出典 文部科学省委託調査「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」(平成20年度) 調査対象:0歳~18歳の子どもを持つ20歳~54歳の父母3,000人

学校の取組や指導の総合満足度

○ 保護者に対する調査においては、約8割の保護者が学校の取組や指導に総合的に「満足している」と回答している。

Q 総合的にみて、あなたは学校の取り組みや指導にどのくらい満足していますか。



※「Benesse 教育研究開発センター 第4回子育て生活基本調査」より

※調査対象：小学校1年生から中学校3年生の子どもをもつ保護者（母親のみ）

（平成19年：6,770人、平成23年：7,519人）